

博士論文 概要書

新渡戸稲造と明治時代

Inazo NITOBE and Meiji Era

早稲田大学大学院社会科学研究科

地球社会論専攻比較文化・比較近代化論研究

小林 竜一

1 本論文の基調

2012年に生誕150周年を迎える新渡戸稲造(1862-1933)は、アカデミズムの内外を問わず、『武士道』*Bushido, the Soul of Japan* (1900)の著者として認識されることが多い。それどころか、そうした断片的な側面が、新渡戸の全体像と同一視される傾きもある。けれども、明治時代におけるその言動を俯瞰すると、思想史、日本文学、ヨーロッパ語系文学、各国文学・文学論、外国語教育、日本史、国際関係論、経済学説・経済思想、社会学、教育学、農業経済学など、新渡戸が多岐にわたる学問領域で活動した人間であったことがわかる。新渡戸という人間を包括的に理解するためには、複数の学問領域を包摂した視点の獲得が要求されるのであり、その広範な活動領域に対応するパラダイムの導入は、現代の新渡戸研究に要請される条件なのである。本論文では、明治時代における新渡戸の言動を「カメラリスト」というカテゴリーを用いて捉えなおすことにより、「内発性」を究極の権威—Final Authority—とする「近代日本人の肖像」を提示した。

2 本論文の構成と各章の概要

本論文の構成は、以下のとおりである。

序 論

第一章 新渡戸稲造の〈源泉〉

第二章 1870年代前半の新渡戸稲造—「英語教育」の意義と「使命」の発見

第三章 札幌農学校生としての新渡戸稲造—前期札幌時代

第四章 新渡戸稲造におけるアカデミックキャリアの形成過程(I)

第五章 新渡戸稲造におけるキリスト教信仰の形成過程

第六章 新渡戸稲造におけるアカデミックキャリアの形成過程(II)

第七章 永遠の否定—札幌農学校教授としての新渡戸稲造—後期札幌時代

第八章 無頓着の中心：「シーパワー理論」と〈太平洋の橋〉

第九章 永遠の肯定—新渡戸稲造と明治日本の膨張

第十章 第一高等学校校長と日米交換教授

結 語

各章の概要は、以下のとおりである。

序 論

序論においては、新渡戸研究の端緒に到達することを目的として、包括的なアプローチの必要性、ならびに、先行研究にみられる認識上の問題点に関して考察を展開した。昨今、アカデミズムにおいて、新渡戸は研究対象として正当に評価されているとはいえないが、この点は、『武士道』との関連性から新渡戸を捉えようとした先行研究において、顕著にみられる現象である。そうした先行研究においては、研究対象である新渡戸に対する批判的な見解

や盲目的礼賛が散見される傾きがあるけれども、問題の所在は、新渡戸にではなく、研究者が依拠する判断基準や学問領域にあるのであり、いずれも新渡戸研究の停滞を招いた要因であるといつてよい。

第一章 新渡戸稲造の〈源泉〉

本章では、新渡戸の没後に刊行された『幼き日の思い出』 *Reminiscences of Childhood* (1934)に依拠して考察を展開した。この著作の刊行に際して、新渡戸の妻が「新渡戸家系譜」を追記したことを重視し、近世までの新渡戸家の歴史を概観した。こうした手続きを踏まえた結果、新渡戸の精神が先祖の浮沈の歴史に共鳴していたことが明らかとなった。同時に、新渡戸の曾祖父、祖父、そして父に連なる特質に注目し、新渡戸家の「血」と新渡戸の「運命」との相関性にも注目した。たとえば 19 世紀後半、新渡戸は札幌農学校教授時代、北海道庁の技師として、泥炭地試験や小作法草案の作成に従事し、北海道における開拓事業を推進した。そして 20 世紀に入ると、台湾総督府技師として、台湾における製糖産業の構造改革を実施し、日本の植民地経営を軌道に乗せた。そして晩年、新渡戸は「平和の使徒」として渡米したにもかかわらず、「軍部の代弁者」とであると誤解され、「太平洋の橋」としての志なかばで客死したのである。一方、新渡戸の曾祖父、祖父、そして父は、経綸の才に富む実践家であり、兵学の継承者であったにもかかわらず、いずれも藩主に誤解されたことがある。とくに、父に至っては「非業の死」を遂げてもいた。こうした背景を視野に入れることにより、新渡戸の先祖のなかに、新渡戸の「予型」を見出すことが可能となる。新渡戸家が培った伝統は、『武士道』において体現されることになる新渡戸の「自己意識」を形成したばかりでなく、新渡戸の「運命」を決定する〈源泉〉としての意味合いを持っていた。

第二章 1870 年代前半の新渡戸稲造—「英語教育」の意義と「使命」の発見

本章では、盛岡における幼年時代から東京英語学校時代を考察の対象とした。前章同様、『幼き日の思い出』に依拠して分析をすすめたが、本章においては、新渡戸が上京に至る過程をめぐる先行研究をサーベイし、新渡戸の「内発性」を重視する立場から、外発的要因に拘泥する従来の解釈の妥当性を検証した。また、さる英文学者が新渡戸を日本における「三大英文家」のひとりに数えているように、日本における洋学摂取の伝統を踏まえつつ、いわゆる「英学史」の観点から、新渡戸の卓越した英語力の源泉を追求することも、本章の主要な関心となっている。幼年時代から英語に接触した新渡戸は、東京英語学校在学中、M・M・スコット(Marion Merriman Scott)という人間に師事した。やがて「英作文」の指導を得意とするスコットの薫陶を受けたことにより、新渡戸の英語学習は思想行為へと転化した。新渡戸は「文学作品」の修辭的要素ではなく、その根幹をなす「キリスト教精神」に関心を持つようになり、スコットの指導を受けた結果、「日本にキリスト教を伝える重要性」と題する文章を執筆するに至った。こうした経緯は、新渡戸において、「英語」がキリスト教信仰を涵養するための媒体となっていたことを示している。けれども、明治天皇が新渡戸家の開拓事業に理解を示したこと、ならびに、自然科学の充実が提唱された演説を聴講したことな

どを契機として、新渡戸はアイデンティティ・クライシスに直面した。このことは、新渡戸が10代前半にして、立身出世と開拓事業の継承、あるいは、日本におけるキリスト教の普及など、容易な解決を許さぬ難題に対峙したことを意味していた。

第三章 札幌農学校生としての新渡戸稲造—前期札幌時代

本章では、札幌農学校生時代の新渡戸を考察の対象とした。はじめに札幌農学校が設立に至る過程を概観し、クラーク(W・S・Clark)のキリスト教信仰の特質を分析した。新渡戸が署名した「イエスを信ずる者の契約」については、クラークのキリスト教信仰のありかたに注目して考察をすすめた。クラークの帰国直後に同校に入学した新渡戸は、クラークの間接的影響を受けながら学生生活を謳歌するなかで、カッター(John Clarence Cutter)の「英文学」に強い関心を抱くようになった。この講座においては、文学作品を大英帝国や近隣諸国の地理的特質や歴史的背景のなかで捉えることが重視され、イギリス史をはじめとして、イギリスやスコットランドの政治的、社会的地勢に対する包括的なアプローチが試みられた。文学作品を観賞することではなく、英国史と英文学に与えた持続的な風俗習慣、ならびに、歴史的背景を重視することを主眼としたカッターの手法は、狭義の文学(作品)研究ではなく、地域研究に接近したものであった。当然、こうした視点は教科書として使用された『英文学文集』*A Hand-Book of English Literature*(1874)の編集方針にも連なっている。しかし、新渡戸は次第に形而上的難問にとりつかれたことに加えて、深刻な喪失体験に遭遇したことによって、再びアイデンティティ・クライシスに直面した。そうしたなかで、カーライル(Thomas Carlyle)の言葉に邂逅した新渡戸は、宇宙全体を貫く Great Law の存在を肯定した。

第四章 新渡戸稲造におけるアカデミックキャリアの形成過程(Ⅰ)

本章では、北海道庁官吏時代、東京大学時代、および、アメリカ留学時代において、一貫してアカデミズムにおける活躍を志向する新渡戸の言動—Outer Life—を分析した。札幌農学校卒業後、学術研究の継続を目的として、任官の延期を申請した新渡戸であったが、この要求が不承認とされたことにより、新渡戸は北海道庁官吏として奉職することを余儀なくされた。けれども、新渡戸は社会人学生として上京することを決断し、予備校の英語講師として自ら学費、生活費を賄いつつ、東京大学で「英文学」や「農業経済学」の関連分野を学んだ。ただし、従来の新渡戸研究において、当時の東京大学の実情については、必ずしも公平な視点から分析されてはおらず、同大学に対して不当に低い見解みられる場合がある。そこで本研究では、従来の研究で提示された解釈の妥当性を検証するために、新渡戸研究者が視野に入れなかった分野に蓄積された先行研究を援用することにより、新渡戸が学んだ教師の存在、ならびに、同大学における思想的影響に注目した。こうした手続きを踏まえることにより、新渡戸研究としては、当時の東京大学に関する新たな解釈を提示した。さらに、東京大学退学後、ジョンズ・ホプキンス大学に学んだ新渡戸については、同大学をアメリカ史学の近代化という現象のなかに位置づけながら、ハーバート・バクスター・アダムズ(Herbert

Baxter Adams)やリチャード・イリー(Richard Ely)を中心に開設された「歴史・政治学演習」を重視することにより、当初は空白であった新渡戸の研究テーマが「日米関係」へと収斂する過程を分析した。

第五章 新渡戸稲造におけるキリスト教信仰の形成過程

従来の新渡戸研究では、アメリカ留学時代の新渡戸を理解するにあたり、アカデミックな側面とキリスト教信仰とが混同される傾きがみられた。概して新渡戸研究者には、新渡戸のキリスト教信仰と研究活動とを同一視する傾向があり、その代償として、新渡戸の専門家としての側面が捨象されてきたように思われる。いわば本章は、新渡戸のアカデミックな側面を明確に把握するために、新渡戸における学術と信仰を峻別した結果としてもたらされた副産物といってよい。そうした意味で、新渡戸のキリスト教信仰—Inner Life—を基調とする本章は、前章との相互補完性により、はじめて意義を有している。なお、新渡戸のキリスト教信仰を考察するにあたっては、第三章で考察したように、新渡戸が「英文学」との接触を契機としてキリスト教信仰を涵養したという事実関係を重視し、いわゆる教会史や宗教思想史的視点ではなく、トマス・カーライル(Thomas Carlyle)やラルフ・W・エマソン(Ralph Waldo Emerson)の存在に注目し、「19世紀英米文学史」の観点から、新渡戸が依拠したクエーカーリズムへのアプローチを試みた。たしかにクエーカーリズムをめぐるのは、同時期にアメリカに留学していた内村鑑三との認識の相違が注目されるころではあるが、クエーカーリズムと新渡戸との関連性については、前書で考察したジョンズ・ホプキンス大学の地理的環境、ならびに、リチャード・イリーによる「社会的連帯」の提唱といった側面が視野に入れられることにより、新渡戸とクエーカー派の主張とのあいだにみられる一貫性を捉えた。

第六章 新渡戸稲造におけるアカデミックキャリアの形成過程(II)

昨今のアカデミズムにおいて、新渡戸が高度な専門知識と社会的実践能力を有する「近代人」としての基盤を形成したドイツ留学時代に関する先行研究の蓄積は、きわめて不十分である。ドイツ留学時代は、アメリカ留学時代に分裂していた信仰と学術研究とが両立した—いわば unity の—時代であるにもかかわらず、従来の新渡戸研究においては多分に軽視されていた。しかし、ドイツ留学時代の前半は、新渡戸の研究テーマが「日米関係」から「農業経済」へと移行した時期であり、新渡戸の精神遍歴を跡付けるうえで、重大な意義がある。また、ドイツ留学時代の後半についても、博士号の取得を目指して「農業経済」の研鑽に励みつつ、実務的な訓練を受けていたという点で、後年のキャリア形成の根幹をなす時期であった。しかも、『武士道』の冒頭にみられるように、新渡戸が「日本の道德観念」に強い問題意識を抱いたひとつの契機も、このドイツ留学時代のことであった。そこで本章では、ボン大学、ベルリン大学、そしてハレ大学で新渡戸が享受した研究環境を分析し、新渡戸の学問的関心が『日本土地制度論』、ならびに『日米関係史』へと収斂する過程を考察した。

第七章 永遠の否定—札幌農学校教授としての新渡戸稲造—後期札幌時代

本章では、北海道庁の官吏や札幌農学校教員など、新渡戸の多方面および活動を捉えるために「カメラリスト（国家官僚型学者）」というカテゴリーを使用した。「官房学（Kameralwissenschaft）」とは、君主の収入や財産を保管する空間を意味するラテン語の camera を語源とする。やがて、そうした業務に従事する人間が「カメラリスト」と称されるようになり、歴史の推移とともに、司法、立法、行政分野において登用される「官吏」を指すようになった。その活動分野は、農林水産業、牧畜狩猟業、鉱業、工業、商業、金融業、国防、教育、医療など、多岐に及ぶものであり、その活動領域も、官吏や実務家から大学教員へと拡大した。「官房学」とは、社会科学、自然科学、そして人文科学が視野に入れられた学問領域のことであるが、こうしてみると、新渡戸においては「カメラリスト」が「社会的実践」の意義を重視する「国家・社会的思想家」であると肯定的な意味で解釈された可能性も指摘される。それどころか、新渡戸が「カメラリスト」のありかたに自己像—Sollen—を投影させたと考えるのであれば、従来、分裂したものとして解釈されていた札幌農学校教授時代における新渡戸の言動に関しては、逆に強固な「一貫性」を指摘せざるを得ない。「国際人」、「教育者」、「敬虔なるクエーカー教徒」、そして「『武士道』の著者」など、矮小化と断片化の憂き目に遭った新渡戸であったが、「カメラリスト」こそ、明治時代の新渡戸を包括的につかまえるための強力なカテゴリーなのである。

第八章 無頓着の中心—「シーパワー理論」と〈太平洋の橋〉

本章の目的は、世紀転換期における〈太平洋の橋〉としての新渡戸稲造の言動を検証することにある。以上の研究目的を達成するために、同時代のアメリカの時代思潮を体現するアルフレッド・セイヤー・マハン(Alfred Thayer Mahan)の存在に注目し、「環太平洋的視野」から考察を展開した。日米関係の推移を踏まえたパースペクティブのなかで捉えられることにより、いわゆる「太平洋の橋」を標榜した新渡戸の言動が、『武士道』の刊行にも認められるように、日本の文化的膨張の推進に傾斜したものであったことが容易に理解される。事実、世紀転換期のアメリカでは、東西の「文化的相違」を強調したマハンが、キリスト教道徳の優越を前提にしつつ、ジャーナリズムにおいて活発に論策を発表し、東西の「文化的相違」を強調した。やがて、マハンが提唱した「シーパワー理論」は、日米関係の帰趨を左右する要因となった。しかし、その一方で、〈太平洋の橋〉を使命としたにもかかわらず、世紀転換期に関していえば、新渡戸がマハンの動向に積極的な関心をもった形跡を認めることは不可能である。そうした意味で、新渡戸はカーライルのいわゆる「無頓着の中心」という境涯にあったと判断せざるを得ない。ただし、本章では、前章で考察の対象とした事実関係を踏まえ、そうした境涯を余儀なくされた新渡戸の「ディレンマ」に注目することにより、公平な視点から、新渡戸の「実像」を提示した。

第九章 永遠の肯定—新渡戸稲造と明治日本の膨張

20世紀を迎えた1901年、新渡戸は官吏として台湾総督府に赴任した。以来1914年に至るまで、新渡戸は台湾統治に関与した。新渡戸が北海道庁技師として泥炭地の改良や小作法

草案の作成に尽力し、北海道の開拓事業に従事した 1890 年代は、日本が日清戦争に勝利し、その後締結された下関条約により、台湾を植民地として獲得した時期でもあった。本章では、「開拓事業の継承」という使命のもと、ドイツ留学時代に研鑽を重ねた新渡戸の学理が、内国植民地である北海道における実践経験を基盤として、外地植民地の台湾において適用される過程について考察を展開した。以上の考察を通じて、「カメラリスト」としての新渡戸の面目を捉えることが、本章の主眼となっている。本章では、新渡戸が台湾総督府に提出した「糖業改良意見書」の意義、台湾協会学校への関与、および、京都帝国大学における植民政策学教授としての言動を分析することにより、「国家官僚型学者」としての側面を基軸とし、新渡戸の学理が実践に応用される過程を分析した。あわせて、「英学」への熱心をみせたこと、ならびに、この時期に内外の注目を集めた『武士道』の受容に関しても、先行研究に鑑みながら若干の考察を展開し、新渡戸を公平に理解するために必要とされる視点、および、公平な理解の条件となる事実関係の把握を重視した。

第十章 第一高等学校校長と日米交換教授

第一高等学校校長時代の新渡戸を考察の対象とした本章では、「教育者」として認識される傾きがある新渡戸を「カメラリスト」というカテゴリーを用いて捉えなおすことにより、新渡戸像の再構築を志向した。第一高等学校校長としての新渡戸の思想史的意義を正当に評価するためには、新渡戸の後衛に位置した狩野亨吉の存在に注目する必要があるように思われる。実際、「自由意志」、「神の存在」、そして「霊魂不滅」を「人類の三大妄想」であるとしたという点で、狩野は新渡戸の対蹠に位置する存在であった。両者の世界観にみられる対照に注目すると、新渡戸の校長就任は、一高に「創造的反目(creative antagonism)」をもたらす契機であり、新渡戸が近代日本における知的伝統の形成において重要な役割を演じた人間であったと理解される。事実、新渡戸は狩野が醸成した「籠城主義」に対抗して「社会的連帯(social solidarity)」という価値を提唱し、同校での倫理講話では、カーライルやゲーテによる文学作品のキャノンを用いて、「ブシドー」のような伝統的価値ではなく、「西洋的教養主義」を積極的に鼓吹した。しかも、新渡戸は『実業之日本』の編集顧問に就任し、高遠な学理を卑近な社会的実践に適用することさえ意識化していた。新渡戸は学理の追求と社会的実践の両立を「カメラリスト」の使命であると看做していたわけである。一方、この時期に披歴された新渡戸の中国・朝鮮観においては、「ヒューマニスト」としての個人的感情と「カメラリスト」としての公的活動とが、厳しく峻別されてもいる。寛容な人間として捉えられがちな新渡戸であるからこそ、公私を峻別する新渡戸の峻厳—そしてディレンマ—は強調されなければならない。また、同校校長在任中、新渡戸は「日米交換教授」として、全米各地の大学で講演活動を行った。アメリカにおける講演活動に関しては、先行研究に準じて考察を展開した。

結 語

「近代日本人の肖像」である新渡戸が、日本における近代化をどのように捉えていたのか

という問題を追求することをもって、本論文の総括とした。新渡戸は大隈重信が主宰した『開国五十年史』に「泰西思想の影響」という論考を寄稿した。伊藤博文、副島種臣、松方正義、山県有朋など、錚々たる執筆者のなかで、新渡戸が自己の体験を踏まえつつ、エマソンを援用しながら独自の解釈を披歴し、日本における近代化の「内発性」を強調したという点は、注目に値する。さらに、この早すぎた「日米比較文化論」における新渡戸の思考においては、絶対平和主義を標榜するクエーカー教徒であったにもかかわらず、海上武力の拡充を前提とする認識の枠組がみられるという点も重視されなければならない。遅きに失した感もあるが、この段階において、ようやく新渡戸はマハンに追いついたというべきであろう。もとより新渡戸とエマソンとの関連性を重視することは、本論文の一貫した立場であった。『開国五十年史』のなかで、日本の近代化における「内発性」を肯定するために、エマソンが援用された点については、従来の新渡戸研究では見落とされた側面であっただけに、十分に強調されなければならない。

明治時代に「自己を語るカメラリスト」たり得たところにこそ、新渡戸稲造という人間の〈真の面目〉がある。

3 本論文の課題

本論文では、「カメラリスト」としての「ニトベ・イメージ」を時系列に提示した。しかし、時系列に固執するのであれば、「日本文化の発信者」という従来のイメージに接近する危険を孕んでいるとはいえ、第十章に「日米交換教授」時代の講演をまとめた『日本国民』*The Japanese Nation* (1912)を組み込むべきであった。もとより本研究は、先行研究に多くを負っているが、一次資料の発掘、発見、ならびに解説という面での学問的貢献度は決して高いものではない。ゆえに、今後は一次資料のさらなる収集や渉猟に努めるとともに、十分な考察がなされなかったテーマを各論として展開させることが要求される。しかも、新渡戸と儒教精神との関係など、本論文で十分に論じきれなかった重大なテーマの存在も指摘される。あるいは、同時代のキリスト教思想家ばかりでなく、仏教思想家の存在も考察の対象とされる必要があるだろう。それに、新渡戸の思想を継承した直系の弟子、ならびに、間接的な影響を受けた勤労青年が新渡戸の精神を如何に受容したのかという問題についても、多分に考察の余地が残されている。また、たとえ新渡戸とは相反する生き方であっても、その影響を受けたことがあるという点に限っていえば、ある意味、新渡戸の落とし子であり、「〈内発性〉の極北」に位置した文学者の「ライフ」を視野に入れる必要もあろう。

それに何より、新渡戸に現代人の願望や固定観念を投影するのではなく、新渡戸と現代日本人との間に厳然と横たわる「断絶」を直視しなければならない。何よりそれ以上に、「新渡戸が現代人の解釈を認めるのか」という問いを閉却することなく、「新渡戸稲造と日本の近代化」の意味を追求しなければならない、「現代人の満悦」に淫することのないように一。